

川上宏奨学金報告書

論文題目：「現代の若者と紅白歌合戦」

2016年度川上宏奨学金をいただき、卒業論文「現代の若者と紅白歌合戦」を執筆することができた。論文の内容と、具体的な調査の内容について以下の通り報告する。

1、卒業論文の要旨

本論文は、大晦日において若者たちは、紅白歌合戦をどう見ている／どう見ていないのだろうか、紅白離れしているとすれば、その背景にはどんな要因があるのだろうか——を論じたものである。また、論文後半では、紅白と家族の関係について触れ、家族に関する質問の回答と、紅白視聴に関連性があるかどうかを示している。

調査方法としては、文献調査と質問紙調査を実施した。文献では先行研究の調査を行い、質問紙調査では、学生 100 人に大晦日のテレビ視聴行動について回答を求めた。

第 1 章では、質問紙調査の結果を元に、調査対象者や各番組の視聴率について分析した。大晦日、7 割以上の若者が家族と実家で過ごしていた。筆者が想像していたよりも家族団欒で過ごしていた家庭は多く、昭和的な家族の喪失はさほど見られなかった。本調査の結果、視聴率では紅白よりもガキの使いが高く、よく視聴されていた。紅白では、ジャニーズのアイドルグループ「嵐」が最も高視聴率であり、演歌歌手が出演すると視聴率はガキの使いに逃げてしまう傾向が見られた。アーティストごとに視聴率が入れ替わっていたのだ。

第 2 章では、若者とアーティストについて分析した。若者に人気のあるアーティストが必ずしも紅白に出場しているわけではないことが明らかになった。若者のニーズに応えることが出来れば、若者は、紅白をより視聴するようになるだろう。娯楽が多様化し、忙しい生活をする若者は普段から録画視聴を好む者も少なくない。紅白を録画視聴で見た人のほとんどがアイドルグループの出演時刻を再生していた。紅白すべてを視聴せずとも、好きなどころだけを選択して、視聴している傾向が見られたのだ。

第 3 章では、家族に関する質問と紅白視聴について SPSS で t 検定を行い、紅白と家族について関連性を調査した。結果、あまり有意な結果は得られず、大きな関連性は見られなかった。家族は戦前の「家制度を中心とする家族」から、戦後の「近代家族」へと変わり、近年は「個人化する家族」へと変貌を遂げてきた。また、テレビを複数台所有している家庭が多かった。つまり、「テレビをひとりだけで見たい」という個人視聴志向の増加とも言える。家庭のテレビ台数の保有率の増加に伴い、それぞれがチャンネルの選択性を持ち、紅白は「家族」単位ではなく、「個人」として視聴される傾向が強まったのだ。

とはいえ、一年を締めくくる大切な日に、実家で家族と過ごしている若者は多数存在していた。しかし、昭和期のようにお茶の間を意識した団欒ではなくなってきていた。若者の認識の中で「家族」の中身が変化していたのだ。それでも今後、紅白は「家族回帰」を

試み、様々な世代が一同に楽しめる、そんな番組をこれからも模索していくべきだろう。

2、卒業論文を書き終えて

今回の卒業論文執筆を通して、自身の関心があった「テレビ番組」、中でも「紅白歌合戦」という国民的番組について、実際に質問紙調査を実施しながら、研究結果に基づいてバランスよく執筆することが出来たと思う。マスコミュニケーション学科らしきのあるテーマで卒業論文を執筆できたこともうれしく思う。自身にとっても身近であった番組について研究することは全く苦ではなく、執筆中も前向きな姿勢で取り組むことが出来た。

「現代の若者と紅白歌合戦」ということで、「現代の若者」目線で自身も物事を述べることができ、時代背景なども踏まえながら執筆した。大学3年生の冬から執筆を始め、およそ1年をかけ完成したので、大変感慨深い。それだけ卒業論文にかける想いも熱いものとなった。大学4年間の集大成として、執筆することができたと思う。

決して私自身の力だけで完成させられたわけではなく、執筆の後押しをしてくださった故川上宏先生とご家族のみなさま、森暢平先生、質問紙調査にご協力いただいたみなさま、お世話になったすべての人に感謝の意を示したい。

3、奨学金の主な用途

研究の中で、参考文献を使用しながら先行研究をまとめていたため、それらの文献購入や、何度か足を運んだ国立国会図書館までの交通費などを、奨学金から捻出している。感謝の意を示したい。

4、最後に

卒業論文執筆にあたり、故川上先生の奨学金の後押しは非常に大きいものでありました。素敵な機会をいただけたことを改めて誇りに思います。本当にありがとうございました。